

研究報告書

厚生労働科学研究補助金（子ども家庭総合研究事業）

研究報告書

中学生と乳幼児の交流が相互の発達に与える効果に関する研究 —保育者による次世代育成をめざした子育て支援プログラムの立案と実施—

主任研究者 七木田 敦 広島大学

研究要旨 本研究は、高校で取り組まれている「保育体験」より早期の中学生から体系的に体験できるプログラムを作成することを目的としている。またその際、従来の学校主導ではなく、保育現場の側から、将来の親となる生徒に期待する育児意識や知識を提供するという保育者主導型のプログラムを立案し実施するというところが特徴である。ところがこれまでの研究では、保育士による授業では明確な効果というものが認められなかった。そこで授業においての生徒の動機付けを高めるために、幼児の日常年齢別に録画したビデオを作成し利用した。また中学校側のニーズに比べ幼稚園保育所側の負担感が大きいということが効果的な保育体験を妨げるものとして提起されたが、今年度は保育者の方で体験の意義を再確認するために中学校の授業に参加し、意見交換する機会を求めた。以上のことより本年度は中学生の保育体験の事前／事後指導において乳幼児への関心や育児意識などのアンケートの結果を比較検討する。さらに保育士が授業に関わることでどのような効果が見られるのかを併せて明らかにする。事前指導に、幼児の日常や発達の様子、さらに遊びの意義、幼児の様子などをビデオ教材などを用いて新たな学習方法として立案し、保育体験の体系的プログラムを図ることを最終目的とした。

A. 研究目的

中学校において「幼児とのふれあい経験」は、家庭科教育においても重要な位置を占め、特に平成10年改訂の中学校の家庭科の学習指導要領には、幼稚園や保育所等での幼児とのふれ合いという

具体的な学習方法が明記された。学校外でもその重要性は述べられており、厚生省（現厚生労働省）では、思春期にあたる子どもたちをめぐる対策の一つとして、1984年より各都道府県において健全母性育成事業が実施され、1991年度

より乳幼児とのふれあいの機会を増やすという目的のもとに思春期保健福祉体験学習事業がなされた。厚生省雇用機会均等・児童家庭局,母子保健課の報告によれば,思春期保健福祉体験の実施市町村数は,1992年度132市町村,1993年度191市町村,1994年度252市町村,1996年度315市町村,1997年度322市町村,1998年度348市町村,1999年度322市町村,2000年度348市町村,2001年度372市町村というように増加の一途をたどっている。

一方、目を諸外国に向けると早くから「異年齢間の幼児とのふれあい経験」の重要性は注目されてきた。アメリカ合衆国では,多くの高校において保育室が設けられ,保育園の幼児が通ってきて高校生と長期間にわたって接する学習が取り組まれてきた(牧野,1993)。また,オレゴン州などでは州独自の「幼児とのふれあい経験」を組み込んだプログラムも実施されている。

またニュージーランドのダニーデン市では,個々の母親運営のプレイセンター(子育て支援施設)が,育児支援にかかわる具体的方法のマニュアル「Child Care Center Start-Up Manual」を作成し,そのなかに近辺の小中学生の訪問(visiting program:保育体験)の受け入れに関する手続きが掲載されている。

わが国においても,これらの「幼児と

のふれあい経験」の効果については,すでに多くの報告がある。家庭科教育においては,保育体験学習が,子どもへの情意的・感情的領域を高めることが報告されている(武藤・伊藤,1988;中西・牧野,1989a)。また花沢(1992)は中・高校の男女に対し,対児感情に関しては,性的要因よりも乳児との接触経験の方が大きな影響を与えることを明らかにした。思春期保健福祉体験学習においても,乳児・育児・子育て・親に対する否定的な認識が減少し,肯定的なイメージや認識を持つ生徒が増加すること,特に,体験前には乳児との接触経験がなかった男子生徒にとって,体験は自己と結びつけて親を今までとは違った側面から捉える機会となっていることが報告されている(石川,1997)。

特に思春期保健福祉体験学習の問題点として,一部の生徒だけが対象であること,その体験が保育学習へとつながっていないことが挙げられているが(小長井,1996),学校教育という制度のなかで,必修科目である家庭科で実施され学校教育のなかに制度として組み込まれていることが必要であると考えられる。このようにさまざまな教育的な意義が期待される「幼児とのふれあい体験」であるが,受け入れ側の保育所幼稚園からは負担感も多く不満や不安も少ないのが実情である(七木田,2005)。

本研究は、高校で取り組まれている「保育体験」より早期の中学生から体系的に体験できるプログラムを作成するために、従来の学校主導ではなく、保育現場の側から、将来の親となる生徒に期待する育児意識や知識を提供するという保育者主導型のプログラムを立案し実施し、その効果について分析することを目的とする。

B. 研究方法

広島県H市内のA中学校における家庭科の授業を受けた2年生4クラス165名を対象とした。そのなかで2年1組には保育体験を行うにあたって保育によるグループワークを実施し、保育体験でも関わった保育士のクラスで実施することにした。以下に研究の手続きを示す。

研究の方法

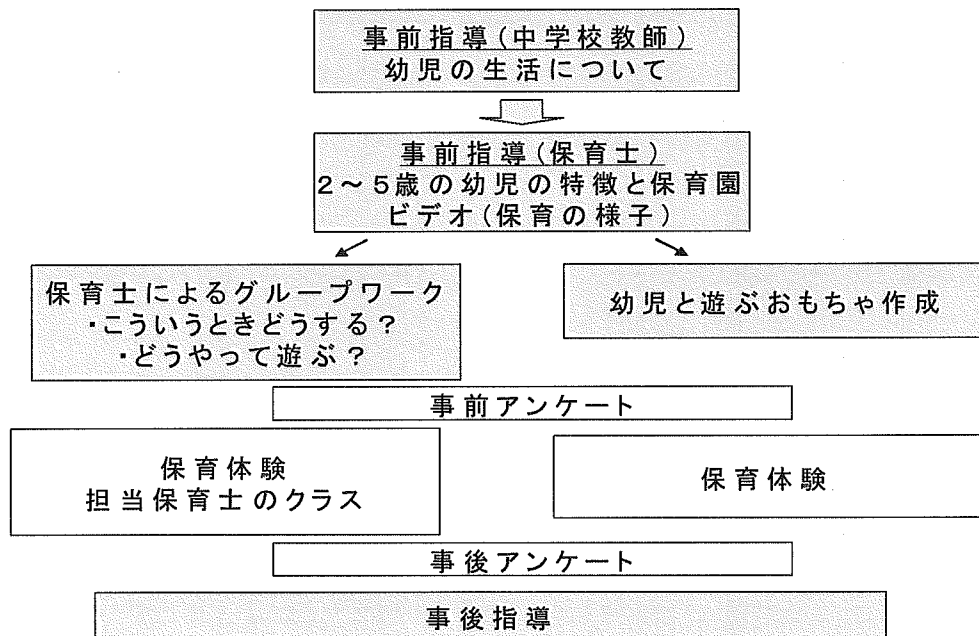


図1. 研究の方法

保育体験を行う事前ならびに事後に、表1に示す質問項目を含む保育体験に関するアンケートを実施した。事前、事後のどちらかに欠席したためアンケートに回答していない生徒5名は、今回の検討から除外した。保育体験を終えて、子育てに対する意識変容をアンケート

により調査し、保育体験の前に実施したアンケートの結果と比較した。アンケート項目は以下の通りである。

(1) 「対児感情」項目

1. 幼児と一緒にいると楽しい
2. 幼児に興味がある
3. 幼児がうるさくするとイライラす

る

4. 幼児の相手をするのは面倒だ

(2) 「幼児理解」項目

5. 自分は幼児など小さい子どもが好き

6. 自分は幼児の気持ちがわかる

7. 自分は幼児を喜ばすことができる

(3) 「学習意欲」項目

8. 幼児と遊んだりふれあってみいたい

9. もっと保育体験の学習をしたい

(4) 「子育て支援」項目

10. 保護者と出かけたりするのが好きだ

11. 保護者は自分にとってわずらわしい

12. 保護者に育ててもらい感謝している

C. 研究結果

保育体験を通じて事前、事後のアンケートから、中学生の意識の変化を、「対児感情」「子ども理解」「学習意欲」「子育て意識」について、顕著な変化を認められたものを中心に分析する。なお表中1組（保育士が事前指導、保育体験に意図的に関わったクラス）の変化についてはグラフ中矢印で示している。

(1) 対児感情について

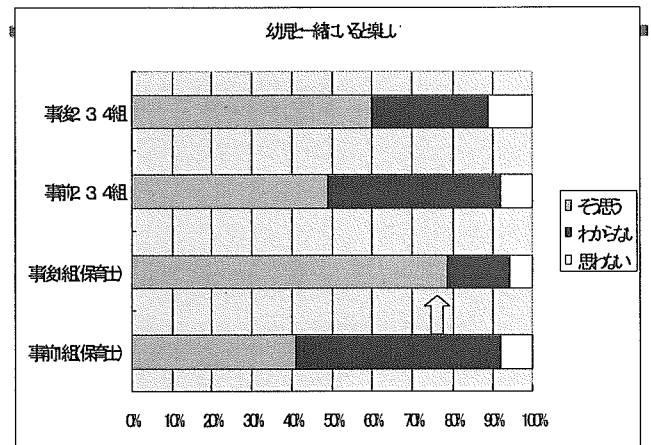


図2. 幼児と一緒にいると楽しい

「対児感情」については、「幼児と一緒にいると楽しい」「幼児がいるとイライラする」という項目で顕著な変化が認められた。特に保育士が関わった1組において、この幼児に対する好き嫌いという相反する項目において、幼児が「好き」という生徒が増加し、「嫌い」という生徒が減少という保育体験の効果が表れた。

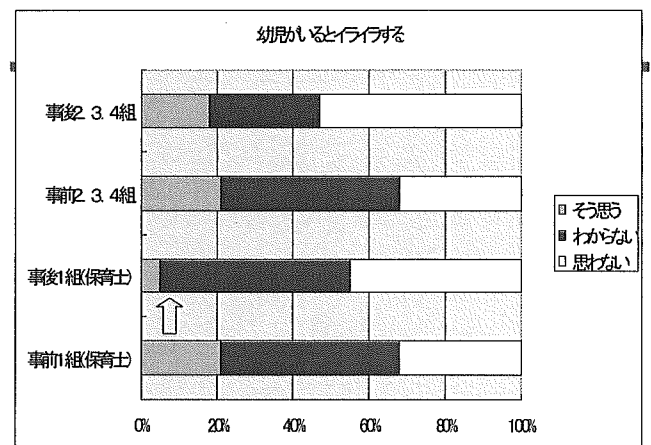


図3. 幼児がいるとイライラする

(2) 「幼児理解」について

「幼児理解」項目では、「幼児の気持ちがわかるようになった」「幼児を喜ばすことができる」の項目で、保育体験後に増加する生徒が増えていた。

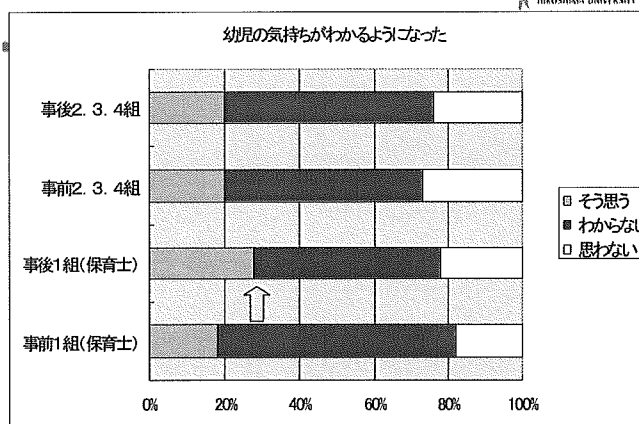


図4. 幼児の気持ちがわかるようになった

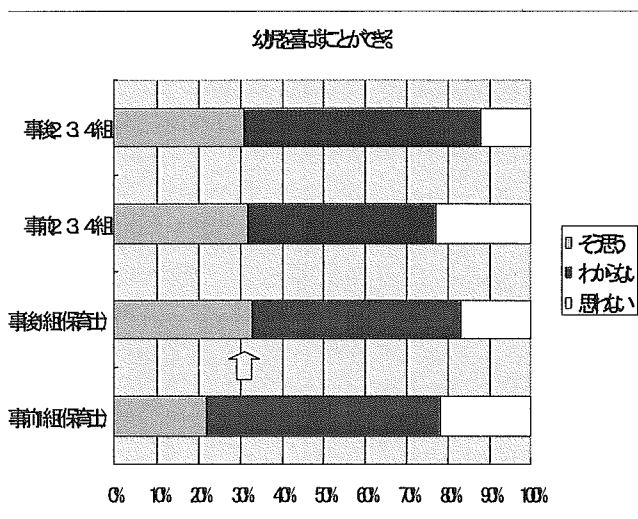


図5. 幼児を喜ばすことができる

また「自分は子どもを好きだと思った」という項目については、保育士が関わったクラスにおいて保育体験後に顕著に減少していた。

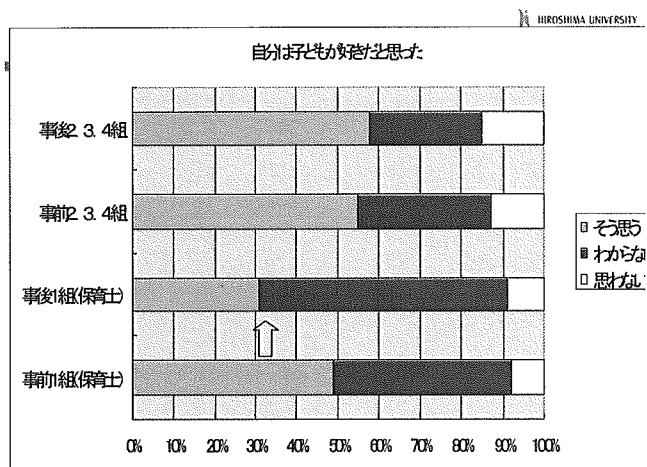


図6. 子どもを好きだと思った

(3) 「学習意欲」について

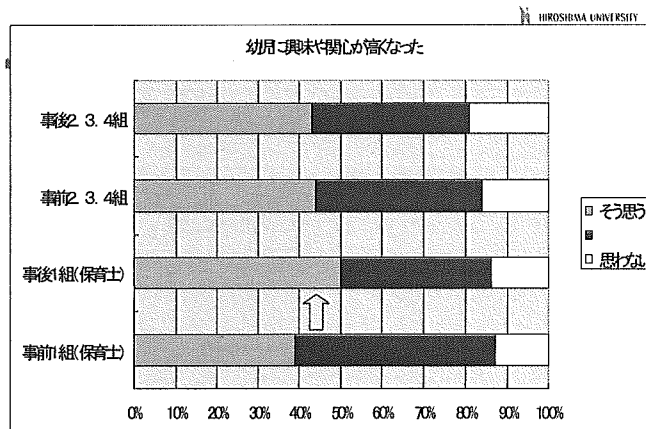


図7. 幼児に興味や関心を持った

「幼児に興味や関心を持った」という保育体験における学習意欲については、保育士が関わったクラスで、他のクラスに比較して大幅な増加が認められた。「もっと保育体験の学習がしたい」という項目では、保育士の関わりの有無に関係なく保育体験後、増加を示していた。

(4) 「子育て支援」項目について
この項目は幼児との保育体験を通して、自分と親との関係を再認識し、自

分が親となったときの心構えを形成する基礎となるような意識について問うものである。結果から、「親は自分にとっておせっかいだと思う」という項目において、保育士が関わったクラスで保育体験を通して減少を示していた。

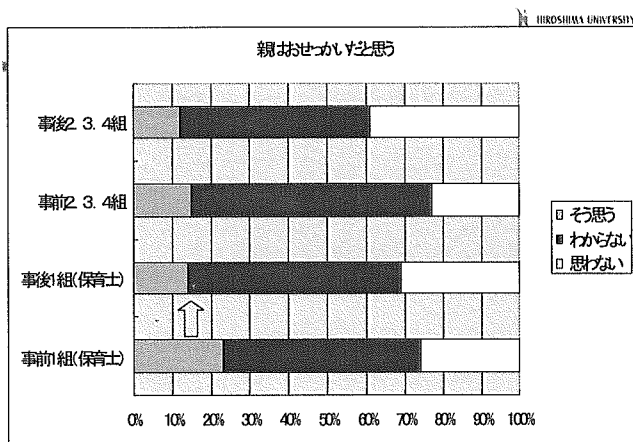


図8. 親は自分にとっておせっかいだと思ふ

D. 考察

中学校において、将来の親となる生徒に期待する育児意識や知識を提供するという保育者主導型の事前指導を実施したグループと、従来のように中学校教師が事前指導するというグループにおいて、保育体験を実施した結果、次のような効果の違いが認められた。

「幼児と一緒にいると楽しい」「幼児に興味がある」「幼児がうるさくするとイライラする」といった対児感情項目や「自分は幼児など小さい子どもが好き」「自分は幼児の気持ちがわか

る」「自分は幼児を喜ばすことができる」といった幼児理解項目では、保育士が関わったグループの方で保育体験後数値が向上した。一方、「もっと保育体験の学習をしたい」「保護者と出かけたりするのが好きだ」「保護者に育ててもらい感謝している」といった学習意欲や子育て支援に対する意識に関わる項目では、顕著な差として効果が認められなかった。特に保育士が関わったグループの方で、保育体験の前に「自分は子どもが好きだ」と感じていた中学生が、体験終了後数値が減少していたことが特徴的であった。これは保育のプロフェッショナルである保育士が関わることで、たんに「好き」というような意識では子どもと関わるできないという気づきが生まれたためではないかと考えられ、むしろ体験が内面化するためには好ましい変化ではないかと考えられた。

以上のことより保育現場の側から、将来の親となる生徒に期待する育児意識や知識を提供するという保育者主導型のプログラムを立案し実施するためには、事前指導の内容をまずは生徒が固有に持つ「対児感情」をベースに「幼児理解」さらには「子育て意識」にまで、「学習意欲」を維持しながら引き上げるような階層

的プログラムモデルが必要であることが示唆された。

このようなプログラムが実施されるためには事前指導に十分な時間の確保が必要となる。特に家庭的な要因や生育歴、地域性に関わるような個人異なった「対児感情」について、できるだけネガティブなものにならないような工夫が必要となると考えられる。今回。数値には顕著に表れなかったもののビデオ映像を用いて、幼児の年齢差や発達の違いについての講義については生徒にとって概ね好評で幼児理解の促進に効果があったと言える。今後は

このようなメディアを効果的に利用する工夫が必要であろう。

保育体験の意義を認め、教育課程の中に組み入れることを積極的に行う必要性は確かめられたが、一方で幼稚園保育所の側では中学生が訪問することへの負担感があるということが示されていた。これは保育体験の多くが中学校の主導でなされており、幼稚園保育所はいわば中学生の体験の「場」としてでしか、とらえられていないという保育者側の失望もあるのではないかと考えた。また自由記述において保育者側から「中学生がどのように学習する

教育プログラム作成のために

HIROSHIMA UNIVERSITY

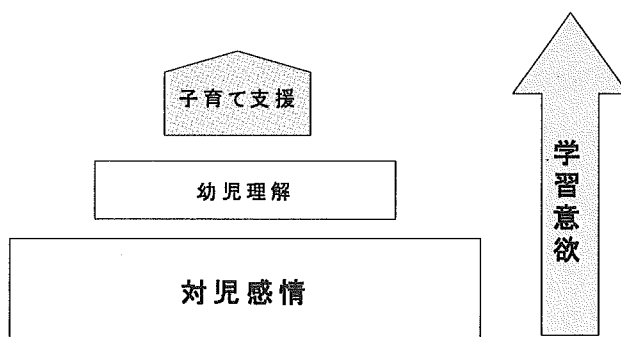


図9. 保育体験の教育プログラム作成案

のかわからない」「今の中学生がわからない」などといった意見も少なくなく、相互の有意義な体験を計画するには、保育者の中学生理解という側面も

必要であろう。

本研究の結果をふまえ、次年度では中学校保育所幼稚園間の「保育体験」実施のための体制整備を図り、プログラム実施する。特に中学

生の保育体験の効果については、今年度の研究を含め多くあるが、一方の当事者である乳幼児へどのような効果を与えるのかについてはほとんど研究がない。そこで次年度はこの点について分析するという計画を立てている。

E. 結論

本研究では、事前指導に、幼児の日常や発達の様子、さらに遊びの意義、幼児の様子などをビデオ教材などを用いて新たな学習カリキュラムとして立案した。また事前／事後指導において乳幼児への関心や育児意識などのアンケートの結果を比較検討するなど、保育体験の体系的プログラムを図ることも目的とし、これまで、たんに子どもと触れ合うのみで終わっていた保育体験の意義と必要性を根本的に検討した。これまで中学校と保育所幼稚園とのよりスムーズな連携関係を形成するには何が必要で、またそれを妨げているものは何なのかを明らかにしてきた。

本研究では、具体的な事前指導プログラムについて、階層的な指導の枠組みを提案した。次年度は本研究の集約として、(1)効果的な事前指導プログラムの立案と実施、(2)中学生の「対児感情」をネガティブにしないような指導内容の精選、そして(3)中学生の保育体験が乳幼児に与える効果について実証的に検討する計画である。

F. 研究発表

七木田敦・水内豊和・津川典子(2004)：中学生を対象とした「保育体験プログラム」の作成と評価に関する実践的研究、日本小児保健学会第51回大会

七木田敦・水内豊和・津川典子・七木田方美(2005)：中学生の「保育体験」における保育所幼稚園と中学校との連携に関する研究、日本小児保健学会第52回大会

七木田敦・水内豊和・津川典子(2005)：中学生の「保育体験」における教育プログラム作成の指針、日本小児保健学会第53大会(予定)

G. 知的所有権の取得状況

なし

保育体験学習に関するアンケート

年 組 (男・女) 番号
保育体験学習で入った組名 組

1. 保育体験はどうでしたか？
- | | |
|--------------------|--------|
| 楽しかった | はい/いいえ |
| 子どもとよく遊ぶことができた | はい/いいえ |
| どうかかわっているのかわからなかった | はい/いいえ |
| 保育士という仕事に興味がある | はい/いいえ |

2. 以下の質問について、保育体験をしてみてくださいあなたの気持ちや状態にあてはまるもの1つに○をしてください。

- | | |
|-----------------------------------|----------------|
| 1) もっと保育体験についての学習をしたいと思った…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 2) 自分は幼児など小さい子どもが好きでと思った…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 3) 親は自分にとっておせっかいであると思った。…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 4) 幼児に興味や関心があることがわかった。…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 5) 自分は幼児を喜ばすことができるほうだ。…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 6) もっと幼児と遊んだり触れ合ってみたい。…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 7) 親と一緒に出かけたり遊びに行きたいと思った…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 8) 幼児の相手をするのは面倒だった。…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 9) 親に対して今まで育ててもらったことに感謝している。…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 10) 幼児と一緒にいると楽しかった。…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 11) 自分は幼児の気持ちがわかるほうだ。…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 12) 幼児がうるさくするとイライラした。…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 13) 自分にもこんな時期があったと思って興味深かった…………… | はい/どちらでもない/いいえ |
| 14) もっと遊び方やかかわり方を教えて欲しかった…………… | はい/どちらでもない/いいえ |

3. 保育体験について教えて下さい。

(1) 保育士さんによる事前の授業や話し合いについて (授業でこんなことをもっと知りたかった)

(2) 保育園の体験の感想を聞かせて下さい (体験をしてみてわかったこと、変わったこと……………)